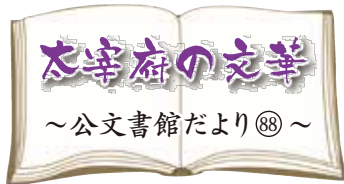


日宋貿易と大宰府

日本の対外関係史研究は、1990年代頃から、平安時代を中心に大きく進展したということができると思います。この時期の対外関係史の主要なテーマの一つが日宋貿易です。このテーマに関して、通説としての地位を占めてきたのは、中央大学教授を長く勤められた故森克己さんの『日宋貿易の研究』でした。この書物は、平安時代以降の対外関係史を考察するために、日本側の史料のみならず中国関係史料なども広く蒐集している点で、現在においても大きな意義を持っています。

森さんは、この著書のなかで、日宋貿易の特徴の一つとして、「荘園内密貿易」という形態が現れたという説を提唱しています。この「荘園内密貿易」とは、政府の管理のもとでの貿易を嫌った宋商人たちと、唐物を手に入れたい貴族・寺社などの荘園領主との利害が一致し、自らの荘園内に直接商船を招き入れ、政府の管理によらない貿易を行ったとするものです。

この説に対して、神戸女子大学教授の山内晋次さんは、森さんが「荘園内密貿易」の存在を示すとした諸史料を一つ一つ再検討して、いずれもがその確定的な根拠とするには疑問があり、少なくとも10～11世紀、「荘園内密貿易」が盛んにおこなわれ、政



府の貿易管理がほとんど機能していないという状況であった可能性はきわめて低い、と結論付けています。現在ではこの考え方が広く受け入れられており、これを批判的に継承しつつ研究が積み重ねられてきています。

一方で、当時の宋商人については、大宰府来着の事例が圧倒的に多く、したがっていま述べた政府の貿易管理の場も大宰府であったことになりました。これまでの研究においても、この点にふれたものも多くありますが、それを考えるための素材がおもに都にいた貴族たちの日記（古記録）などであるという史料的な制約が大きいことは否めません。現状では、鴻臚館跡や博多遺跡群の発掘調査成果などについては、しばしば言及されていますが、大宰府についていえば、たとえば10世紀後半の大宰府政庁第三期の再建、11世紀初頭の府官層の台頭、また当該期における大宰府財政の変容などの問題が頭に浮かびます。こうした点を加えて、平安時代における大宰府の対外的機能と日宋貿易との関わりをさらに深く検討していくことが、今後の課題ではないかと思えます。

大宰府市公文書館 重松 敏彦